

金融経済研究

第37号

2015年3月

C O N T E N T S

[論 文]

- Taylor Rule or McCallum Rule for China's Monetary Policy Cicely Liu 1
 負債構成と資本構成 富田信太郎・池田直史・辻幸民 19
 銀行業の寡占化は金融政策に如何なる影響をもたらすか? 山本康裕 41
 消費者から見た銀行窓販 近藤隆則・白須洋子・三隅隆司 62

[書 評]

- 寺西重郎著『戦前期日本の金融システム』(伊藤 修)
 建部正義著『21世紀型世界経済危機と金融政策』(掛下達郎)
島村高嘉著『戦後歴代日銀総裁とその時代』(中島真志)
 岡田義昭著『グローバル化への挑戦と開放マクロ経済分析』(佐藤俊幸)
 吉國眞一・小川英治・春井久志編『揺れ動くユーロ』(星野 郁)
 前田真一郎著『米国リテール金融の研究』(晝間文彦)
 折谷吉治著『中央銀行制度の経済学』(安孫子勇一)

2014年度日本金融学会春季・秋季大会経過報告
 各部会報告記事

島村高嘉著『戦後歴代日銀総裁とその時代』

東洋経済新報社, 322頁, 2014年

1 はじめに

日本銀行総裁の評伝としては、吉野俊彦氏の『歴代日本銀行総裁論』（毎日新聞社）が世評に名高い。これは、初代総裁の吉原重俊から、第23代の森永貞一郎までを取り上げている（増補改訂版, 1976年）。吉野氏が、こうした総裁の評伝を執筆したのは、「日本の金融政策の発展の様相を理解するための補助手段とすること」が狙いであったとされている。

また、もう少し柔らかいものとしては、後に日銀の副総裁を務めた藤原作弥氏の『素顔の日銀総裁たち』（日本経済新聞社, 1991年）がある。これは、日銀詰めの金融記者として取材対象だった日銀総裁たちについて、「パーソナルなエピソードをスケッチの形で残しておくことも、ジャーナリストの使命の1つ」としてまとめられたもので、第22代の佐々木直から、第26代の三重野康まで5人の総裁を取り上げている。

本書もこうした系譜に連なる1冊であり、著者の日銀時代の経験を踏まえて、戦後の歴代総裁の足跡をたどったものである。著者は、1955年に日銀に入行した後、32年間勤務し、広島支店長、国庫局長、審議役などを歴任した。その後は、防衛大学、中央大学などで教鞭をとった。本書は、こうした著者の

日銀時代の経験と長年の蓄積に基づいてまとめられたものである。

本書では、戦後に的を絞り、第18代の一萬田尚登から、現総裁の第31代黒田東彦まで14人の総裁が取り上げられており、ポスト吉野の総裁列伝の空白を埋めるものとなっている。

2 本書の特徴

本書の特徴は、以下のとおりである。

第1に、総裁1人ごとに1章を割いているが、それぞれの章では、①時代的背景、②政策運営、③政策評価、④人物評伝という4つのパートに分けて解説されており、それぞれの総裁がどういう時代背景の下で、何を考え、どのような政策運営を行ったのかがわかりやすく解説されている。

第2に、著者もまえがきで述べているように、「堅苦しい学術論文風となるのを極力避け、政策現場の臨場感や世相の現実感を添えるべく、炉辺談話風のものとする」ように執筆されている点である。この試みは功を奏しており、戦後の経済情勢と金融政策について理解を深めるための1冊であると同時に、読み物としてもかなり興味深いものとなっている。

第3に、各章の人物評伝において、筆者と各総裁との接点となる体験談が描かれている点である。入行時に訓示を受けた経験（新木総裁）、支店の若き調査担当として雲の上の存在であった総裁に会った経験（山際総裁）、海外駐在を命ぜられ自宅に挨拶に行ったときの経験（宇佐美総裁）、役員集会で日銀短観をサポートする発言をしてもらった経験（佐々木総裁）、揮毫を依頼した経験（前川総裁）、支店長として総裁を迎えたときの経験（澄田総裁）など、各総裁との公私にわたるやりとりが、各章を温かみのあるものとしている。こうしたエピソードは、日銀に長年勤務し、かつ各総裁と接点のある位置にいた著者にしか書けないものであり、本書の価値を一層高めているものといえる。

3 本書の意義

ここで、本書の意義と全体を通じた印象について述べておくこととしよう。

第1に、「通貨の番人」としての日本銀行総裁の責任の重さである。いうまでもなく、金融政策の動向は、日本経済に大きな影響を及ぼす。それだけに、日銀総裁は、政治家や経済界などから常に風圧にさらされる難しい役柄である。政官界、市場関係者、経済界、消費者などは、それぞれの利害が異なっているため、すべてを納得させる政策は望むべくもなく、金融緩和と政策・引締め政策ともに、何らかの批判がつきものである。また、時には、海外からの圧力が加わることもある。こうした中で、目先の利害に偏することなく、国民の中長期的な利益を重視しつつ、したたかに政策を遂行しなければならない。うまく舵取りをやって当たり前、何か失策があれば後世まで厳しく批判されるという難しいポジションである。また、政策の断行にあたっては、しばしば四面楚歌、憎まれ役の立場に立たされる。こうした中で、歴代総裁がいかに対処してきたかを、本書を通じて知ることができる。

第2に、各総裁の政策は、その時代背景とは無縁ではないということである。国際通貨危機と円切り上げ調整の失敗（佐々木時代）、二度の石油危機と輸入インフレ対応（森永・前川時代）、バブルの発生と崩壊（澄田・三重野時代）、バブル後遺症と失われた10年（松下・速水時代）、長期デフレからの脱却対応（福井・白川時代）などである。こうして

みると、日銀総裁にとって任期中の5年が平穏無事であったことなどといわず、常にその時々に対応が必要とされる難題に直面していたことがわかる。しかも、その時々政策課題は、時代とともに大きく変化するとともに、次第に複雑なものとなっている。そうした中であっても、特に激動期の困難な時期に遭遇し「悲劇の総裁」と呼ばれたケース（佐々木総裁）や、石油危機に果敢に対応し「名総裁」と評価されているケース（森永総裁）など、時代背景と総裁の個性の「相互作用」の中で政策が打ち出され、それがそれぞれの評価につながっている。

第3に、そうした中で、総裁の個人的な資質や決断力、リーダーシップなどが、その時々政策に色濃く反映していることである。「カリスマ性を持った個性あふれる独自の風貌と抜群の行動力」（一万田総裁）は有名であるが、それ以外にも「見識と気骨の主であり、包容力に富む鷹揚な人柄」（森永総裁）、「内外金融にわたる高い見識と力量」（前川総裁）、「実行力に富む政策マンであり、日銀のプリンス」（三重野総裁）など、それぞれの個性が、その時々政策対応に結びついている。また同時に、各総裁の運・不運を感じさせられる面もある。たとえば、一万田総裁は、正副総裁と5人の理事が公職追放になったことにより予想外のかたちで登板している。こうした事情がなければ、「一万田法王」と呼ばれる強力な日銀総裁は誕生しなかったかもしれない。一方で、就任後に大きな外生的ショックに遭遇した不運な総裁も少なくない（佐々木総裁のニクソン・ショック、白川総裁のリーマン・ショックなど）。

4 本書の課題

本書では、歴代日銀総裁の足跡をたどったうえで、終章において「歴史に学ぶ政策の実践知」をまとめている。著者が政策の実践知として挙げているのは、①政策運営の前提となる的確な情勢判断、②政府と日銀との間の協調関係、③国際的な政策協調の裏面（自国の経済政策の失敗の他国への押しつけ）への考慮、の3点である。この部分は、本書を通じた考察を集約した部分であるが、惜しむらくは2ページほどの短い記述にとどまっている。欲をいえば、この部分の考察をさらに十二分に展開し、歴代総裁の苦難の歴史から得られた教訓を今後の政策遂行に活

かすべく、さらに深く書き込んでほしかったところである。

また、ここに含まれていない点として、中央銀行の「コミュニケーション・ポリシー」がある。最近では、中央銀行と市場との対話が重要性を増してきており、また、市場や国民の期待に直接働きかけることを目的とした「フォワードガイダンス」の導入も進んでいる。日銀総裁は、記者会見などを通じて、日銀のコミュニケーション戦略の最前線にいるだけに、そのコミュニケーションの巧拙が金融政策を左右することも十分ありえる。こうした論点も含めて、今後、機会があれば「実践知」の部分をさらに拡充して頂くことを希望したい。

5 おわりに

黒田現総裁については、就任後1年ということや、異次元の金融緩和の帰趨が不透明なこともあって、暫定的な評価のみにとどまっている。これは、「2年間でターゲット」としている「量的・質的金融緩和」の政策目標の実現の可否を見る必要があるとともに、出口政策をどう進めるかまで見極めないと評価ができないことによるものであろう。数年後に、異次元の金融緩和の評価が定まった段階で、吉野版にならって「増補改訂版」の実現を望みたいところである。

(麗澤大学 中島真志)